

第 54 回中・四国アメリカ学会年次大会
2026 年 11 月 28 日（土） 広島経済大学立町キャンパス
研究報告

1. 自由論題

「目的があるのならば手段について気にする必要はない *Cum habemus intentum, non curemus de modo*」－19 世紀ニューヨークにおけるイタリア系亡命者の反教権主義運動とアメリカにおける排外主義の促進

林 孝洋（愛媛大学）

本報告では、カトリック批判を軸にアイルランド系移民と合衆国市民の分断を煽ることで、市民を自らの支援者に変えようとするイタリア系亡命者の試みの一端を明らかにする。19 世紀のイタリア半島で生じた種々の改革／革命運動の総体であるリソルジメント運動の最中、ジュゼッペ・マッツィーニを中心とした共和主義者は革命によるイタリア統一を目指したが、それら革命は最終的にすべて失敗に終わる。革命の失敗に伴い、多くの亡命者を輩出し続けたことにより、イタリアの共和主義運動は亡命者を媒介にしたトランスナショナルな運動へと変化していく。このような背景のもと、合衆国は 1821 年のピエモンテ革命の亡命者たちが到来して以降、イタリア半島外のリソルジメント運動の舞台の一つとなった。

合衆国知識人はヨーロッパの革命を合衆国が誇る「1776 年の価値」の伝播として認識していたため、絶えずリソルジメント運動に注目していたし、合衆国政府はヨーロッパにおいて自由主義政府が誕生することは、商業的利益を合衆国にもたらすと考えていた。したがって、合衆国ではヨーロッパの亡命者に友好的である者も多かった。このような親亡命者的環境においてイタリア系共和主義者の亡命者たちによる政治活動が展開される。その中で、合衆国の中で最も影響力を持った活動は反教権主義運動である。カトリックの持つ位階制と世俗支配を批判する反教権主義は、マッツィーニ主義の活動の理論的柱の一つであった。

イタリア系亡命者たちは、ジャガイモ飢饉により大量のアイルランド系移民が到来したことでカトリックに対する反感が高まっていたニューヨークにおいて、イタリア半島と合衆国の共通の問題として反教権主義の理論を持ち出し、耳目を集めることに成功した。すなわちイタリア系亡命者は、教皇庁による世俗支配を「独裁」と共に語り、合衆国のカトリック勢力、主にアイルランド人を合衆国の「自由の敵」として表象したのであった。この点について、マッツィーニが結成した政治組織「青年イタリア」のニューヨーク支部の指導者を務めたエウレテリオ・フェリチェ・フォレスティは、マッツィーニに宛てた手紙でニューヨークにおいて、イタリアへの関心を高めるためには「反教権主義のプロパガンダがおそらく効果のある唯一の策」であると報告している。

以上、本報告では、イタリアにおける共和主義運動とニューヨークでの亡命者の活動を整理しつつ、イタリアの文書館史料を用いてイタリア系亡命者の「戦略」としての反教権主義運動を分析する。それにより、アイルランド系移民とアメリカ市民の分断を利用しながら、イタリア統一支援を促進するイタリア系亡命者の政治活動を明らかにするとともに、アメリカにおけるネイティヴィズムの興隆の要因をトランスナショナルな視点から再評価することを試みる。

闘争のための逃走

——19 世紀後半キーウエストにおける亡命キューバ人とサンカルロス

山本航平（就実大学）

16 世紀初頭以来スペインに統治されていたキューバにおいて、独立を求める大規模な反乱が初めて勃発したのは 1868 年のことであった。第一次独立戦争（十年戦争）とよばれるその反乱は 1878 年に終結し、キューバ人（クリオーリョ）は一定の自治や権利を獲得したものの、独立には至らなかった。しかしながら、十年戦争は第二次独立戦争（1895-98 年）の基盤となり、第二次独立戦争が形を変えた「米西戦争」の結果として、スペインによるキューバ植民地支配は終焉を迎えた。

19 世紀後半のキューバ独立運動を取り上げた従来の研究においては、第二次独立戦争の指導者ホセ・マルティの思想・行動や、キューバ島内での独立派の人びとの動きに焦点があてられる傾向が顕著であった。他方、近年の研究では、グローバル・ヒストリーやアトランティック・ヒストリーの動向をふまえて、キューバ島外において組織化された脱植民地運動にも光が当てられてきている。それらの先行研究の知見にしたがうならば、キューバ独立運動を駆動させた主たるアクターは、スペイン当局の監視の目が及ばない「国外」に在住する亡命者であった。

十年戦争勃発後まもなく、亡命キューバ人の波がアメリカ合衆国に到達した。なかでも 19 世紀後半にもっとも多く亡命キューバ人人口を抱えた場所こそ、合衆国本土で最南端に位置する、フロリダ州の小島キーウエストであった。キーウエストがキューバ独立運動の中心地であったという解釈は、キューバ史研究の通説になりつつある。ただし、従来の研究は、亡命者コミュニティのなかで指導的地位にあった人物の伝記的な側面が強いことは否めない。したがって、当時数多く結成された協会・結社が果たした役割など、キーウエストを磁場として展開されたキューバ脱植民地運動のダイナミズムはいまだ不明瞭なところが少なくないといえよう。

以上の研究動向をふまえて本報告では、先行研究でたびたびその重要性が指摘されながらも正面から議論されることがほとんどなかった、サンカルロスとよばれる協会に着目する。1871 年に創設されたサンカルロスは、キーウエストの亡命キューバ人の子供に対してスペイン語でキューバの歴史や文化を教える教育機関であると同時に、宗主国スペインとの闘争を推進するために「愛国的」なイベントや儀礼が実施される場であった。亡命キューバ人にとっての紐帯の象徴であるサンカルロスは、かれらの脱植民地思想の醸成にいかに関与したのだろうか。本報告は、その問いを検討する作業を通じて、亡命キューバ人の人的ネットワーク（ソシアビリテ）の位相を明らかにする足がかりとしたい。

2. シンポジウム レジリエンスを問い直す ー北米の歴史・文学・文化から

モデレーター：岸野英美
(近畿大学経営学部教養・基礎教育部門)

企画趣旨

トランプ政権という存在は、民主主義や連邦制、ひいては国際秩序を解体する破壊的な力なのだろうか。あるいは、従来の政治や社会システムに潜在する脆弱性を可視化し、その再編や変容を始動させる力なのだろうか。この問いは、現在のアメリカ合衆国そのものを評価するだけでなく、複合危機の時代を生きる私たちがいかにして新たな制度や関係性を構築すべきかという普遍的な課題へと接続する。それを解き明かすカギのひとつとなるのが「レジリエンス (resilience)」という概念であろう。従来、レジリエンスは失った状態から元へ戻る力としてのみ理解されることが多かった。だが、秩序そのものが揺さぶられる現代、私たちは維持／更新すべきものを選択しながら、危機への対応を通じて新たなシステムや可能性を生み出していく過程としてレジリエンスをとらえ直す必要がある。

そもそも「レジリエンス (resilience)」は、ラテン語の「resilire (跳ね返る、後方へ戻る)」を語源とする。17世紀以降、主として物理学の領域において、外力によって変形した物体が原状へ戻る性質を示す概念として発展した。20世紀に入り、C・S・ホリングはこの概念を生態学の領域へ取り込み、平衡状態への回復速度を重視する工学的レジリエンスと、攪乱を吸収しながら構造や機能を維持する生態学的レジリエンスとを区別した。心理学でも、20世紀半ば以降、心の弾性や自我の強さ、脆弱性と適応に関する研究が進展し、E・E・ワナーらによる長期的な研究によって、苦境にあっても適応し成長する力を示す概念として定着していった。一方、人文学領域において、レジリエンスは物理学や心理学で扱われてきたような測定可能な回復力に限るものではなく、喪失や災害、暴力などの経験を通して自己を取り戻す過程が議論される際に用いられるようになった。とりわけ、困難やトラウマの経験がいかに語られ、記憶されるのか、また、個人の自己認識や共同体がいかに再構成されるのかに焦点が当てられ、その射程はいまも拡大しつつある。

以上を背景に、このたびのシンポジウムでは、4名の報告者が北米の歴史、文学、文化の観点からレジリエンスを元の状態への回復や困難に耐える個人の能力としてだけでなく、抑圧や危機のなかで新たな関係性や可能性を切り拓く力としてとらえ直していく。換言すると、従来の回復の可否をめぐる議論から、危機を経て新たに何が生まれ得るのかという議論へと転換することが本シンポジウムの目指すところである。

最初の報告者である南山大学名誉教授の川島正樹氏は、アメリカにおける黒人差別の構造そのものが時代に応じて形態を変えながら再生する現象を「負のレジリエンス」、それに対する抵抗や連帯を「正のレジリエンス」と位置づけ、両者のせめぎ合いを議論する。二人目の報告者である広島大学の城戸光世氏は、奴隷制から逃げることを生存の戦略としてだけでなく、抑圧的秩序を拒絶する抵抗のかたちとしてとらえ、レジリエンスを他者との関係性に起因する「共に生

き延びる力」として提示する。三人目の報告者である広島大学名誉教授の伊藤詔子氏は、H・D・ソローの『ウォールデン』を、社会、個人、自然という複数の次元における危機と再生の過程を描く「レジリエンスの書」として読み直す。最後の報告者である岸野は、ターニャ・タガクのアザラシ表現を分析し、創造的实践によってイヌイットの文化や自然との関係を再構築し、未来へつなぐレジリエンスを探る。

4名の報告者は、レジリエンスを抑圧への抵抗、関係性の再編、記憶や文化の継承による未来創出の力として再定義する。トランプ政権をめぐる冒頭の問い——今まさに私たちが直面している問題——を重ね合わせながら、レジリエンスを見つめ直し、改めて北米の歴史や社会、文化を議論する契機としたい。フロアの皆様とともに考察を深め、実り多きシンポジウムとなれば幸いである。

アメリカのレイシズムをめぐる「正」と「負」のレジリエンス ——「人種」の脱構築に向けた歴史家による物語りの試み

川島 正樹（南山大学名誉教授）

本シンポジウムのキーワードである「レジリエンス」という用語は、一般的には、差別的ないし抑圧的な構造の力に対抗する、主に個人レベルの人間の尊厳の剥奪に抗する復元力として、肯定的に使用される。しかしながら、独立 250 周年の今年、未だ完全に克服されたとはいえないアメリカ合衆国のレイシズムの歴史をめぐるのは、近年の BLM（Black Lives Matter）運動が象徴する、それに抗う側の草の根レベルのレジリエンスの脈絡と共に、姿形を変えて再生する差別構造のみならず、それを草の根レベルでも支える引力のような反動的ベクトルの根強さも看過し難い。

本報告では、最高裁による「ラヴィング対ヴァージニア」判決（1967）まで継続した「血の一滴の掟」の法制化を伴うアメリカ的レイシズムの本質を、単なる肌の色に纏わる偏見を超えた、人間集団に優劣をつけ、特定集団の尊厳を否定しつつ収奪する構造と捉える。その起源に於いて庶民の広範な連帯という「脅威」を阻むために構造化された「分断統治」は、その時々の支配層によって時代の変化に合わせて草の根レベルでの支持も調達しつつ、言わば技術革新を重ねながら、今日まで再生し続けている。本報告では、そのようなレイシズムの再生力を「負のレジリエンス」と捉え、これに抗う被抑圧者の抵抗やそれが呼び起こす広範な共感や共通利益に基づく政治的な連帯の広がりを「正のレジリエンス」と定義する。

本報告では、アメリカ的レイシズムをめぐる「正」と「負」両者の相克の歴史を、長らく歴史家の間で積み重ねられてきた論争を振り返りつつ、アメリカ的レイシズムの創成期である 17 世紀末から 350 年にわたるアメリカ史全体を駆け足で俯瞰する「物語り（ナラティブ）」として提示することを試みる。長期的な構造分析に基づく歴史家の「物語り」と、文学研究の分野で長らく蓄積されてきた豊かなナラティブ研究を交差させることで、残存する「人種」に基づく差別構造の脱構築に向けた議論のみならず、学際的で統合的な地域研究としてのアメリカ研究を構成する多分野の研究者相互の意義ある対話の切っ掛けになることを願う次第である。

逃げる女たちのレジリエンス—二人のハリエットの奴隷制への抵抗

城戸光世（広島大学）

本発表では、奴隷制からの逃亡を経験した二人の女性、Harriet Jacobs (c. 1815–1897) と Harriet Tubman (c. 1822–1913) の人生や言動、その著述を取り上げ、奴隷制下の女性たちにとっての「逃げる」という戦略を、レジリエンスの観点から捉え直したい。

ハリエット・ジェイコブズは、北カロライナで奴隷として生まれ、祖母の家の屋根裏での7年間に及ぶ潜伏生活を経て北部へ逃亡し、のちに黒人女性や解放奴隷の救済活動に尽力した。その奴隷制下での苦悩を自らの経験として記した自伝『ある奴隷少女に起こった出来事』

(*Incidents in the Life of a Slave Girl*, 1861) は、作家でアボリショニストとして著名だった Lydia Maria Child の編集と序文によって刊行されたものの、やがて長く忘れられることとなった。1960年代以降、公民権運動や女性解放運動の高まりとともに奴隷体験記がアメリカ文学・歴史研究の重要な資料として再評価されるなか、本作も再発見され、1981年には歴史家 Jean Fagan Yellin によってジェイコブズ自身の著作であることが史料的に裏づけられた。以来、奴隷叙述研究やフェミニズム批評の中心的テキストの一つとなっている。

一方ハリエット・タブマンは、1822年頃にメリーランド州に奴隷として生まれ、1849年に逃亡したのち、地下鉄道の「車掌」として繰り返し南部へ戻り、家族や友人を中心に約70名を自由へと導いた。南北戦争では北軍の看護師・斥候・スパイとして活動し、晩年には女性参政権運動にも参加した。自らの声で体験を書き残したジェイコブズとは異なり、非識字だったタブマンの場合、その生涯と声はおもに他者によって記録された伝記や証言を通して伝えられている。しかし、一方が「逃げる」ために屋根裏に留まり、他方が逃亡後に他者を「逃がす」ために危険な南部へ戻ったという対照的な軌跡には、家族や共同体との関係のなかで自由を追求するという重要な共通性が見出せる。

レジリエンスは一般に、逆境に耐え、そこから回復する個人の力として理解されてきた。しかし奴隷制という抑圧的な制度のもとでは、既存の状態への回復や環境への適応は必ずしも望ましいものではない。ジェイコブズとタブマンにとって逃亡とは、奴隷制の暴力から身を守る行為であると同時に、その秩序そのものを拒絶する抵抗の実践であった。彼女たちにとって奴隷制下のレジリエンスとは、抑圧的な状況に適応して生き延びる能力ではなく、そこから逃れ、他者との関係を維持し、さらには他者が逃れるための条件を作り出す力だったのではないか。本発表では、二人の逃げる女たちの軌跡を比較することで、レジリエンスを個人の強靱さや回復力としてではなく、他者との関係のなかで形成され、抵抗と連帯へと展開する力——いわば co-resilience（共に生き延びる力）——として再考したい。

レジリエンスの書『ウォールデン』ーソローの隠れたナラティブを追う

伊藤詔子（広島大学名誉教授）

本発表は、建国 250 年のアメリカの変貌に際し、Henry David Thoreau が 1854 年に刊行した『ウォールデン』（*Walden*, 1854）を、改めてレジリエンスの書として読み直す試みである。ソローが建国 69 年目に、国の在方、生き方を議論した『ウォールデン』は、従来エコロジー思想の予言とマイノリティ救済の国民的書物として読まれてきた。またイギリスロマン派の詩学をアメリカ的土壌に移し替え、野生の詩学というアメリカ文学独立思想と文学技法確立の傑作として、詳細に分析研究されてきた。しかし本発表では、最近注目されている病の研究から、三重のレジリエンスの書として『ウォールデン』を読みなおす。

第一のレジリエンスは、同書が初めて明らかにした、Concord の Slave Town からの脱却に見出せる。独立前 Concord は Slave Town であったが、1776 年以降 32 名の奴隷を開放し、独立戦争開戦の町となり、1840 年代にはアボリショニズムの急先鋒の町になった。この事実を初めて明らかにしたのが、『ウォールデン』第 14 章であり、アボリショニズムの思想的基盤が、“Civil Disobedience”(1848)であった。

第二には、この書は作家の病と兄喪失のトラウマの克服の側面を持つ。ソローは病の人であったが、いかにして湖で健康を取り戻し、トラウマを克服したかに注目し、それが野生の詩学樹立につながったと議論する。

第三のレジリエンスとして、この書が、ソローの野生リンゴへの秘めた想いが隠されている点に注目する。1862 年 5 月に亡くなったソローの最後の作品となった「野生リンゴ」（“Wild Apples,” 1862）は、*The Atlantic Monthly* に 1862 年 11 月にエマソンの奴隷解放宣言賞賛の文章と同時に掲載された。ソローのこの遺作は、野生リンゴの歴史・生態・文化的意味を通して、自然と人間の関係の喪失と回復を語る重要なテキストだとされる。ソローの『ウォールデン』には、彼の最後の作品となったこのエッセイへとつながる野生リンゴに対する想いの発端が見出せる。ソローは「人生の成功は果物のなる木を庭に植えることだ」としたが、それはウォールデンではかなわず、元奴隷、ブリストア・フリーマンに託されたのだった。

本発表は、以上三つの観点から、ソローの『ウォールデン』を、1840 年代国家的にも個人的にも危機の時代にあった新世界と詩人の、レジリエンスの書として論じる。

変わりゆく氷の世界に響きわたる声

—Tanya Tagaq のアザラシをめぐる表現にみるレジリエンス

岸野英美（近畿大学）

イヌイットの喉歌である「カタジャク (katajjaq)」を継承し、カナダ・ヌナブト準州 Ikalukutiak (Cambridge Bay) で育ったアーティスト・作家の Tanya Tagaq は、創作を通してカナダ極北地域および北極圏のイヌイットのコミュニティに長らく影響を及ぼしてきた（不）可視的な植民地主義的暴力に向き合っている。Tagaq の紡ぐことばと重なり合う唸り声や叫び声のようも聞こえるその歌声は、自然と人間、そして過去、現在、未来を結びつけ、イヌイットの世界観を力強く表現している。

Tagaq の作品において、重要なモチーフのひとつがアザラシである。アザラシは、イヌイットの生業や生活と結びつく一方で、昨今の気候変動による北極圏の環境変化や、動物保護をめぐる議論とも深く関わっている。それが如実に示されるのが、2014 年のポラリス音楽賞授賞式における Tagaq のパフォーマンスである。Tagaq はアザラシの毛皮を腕に巻き、政治性の高いパフォーマンスを披露した。このパフォーマンスは、環境をめぐる問題と先住民に対する植民地的暴力とのつながりを示唆するとともに、イヌイットの生業であるアザラシ猟と、イヌイットの文化的、精神的な世界観を伝えた。だが、動物愛護団体やその支持者から強い批判を受け、物議を醸した。

アザラシをめぐる議論において重要なのは、先住民の権利と動物保護のどちらを優先するかという二項対立だけではない。むしろ、アザラシを守るという正義を誰が語るのか、あるいは、人間と動物との関係をめぐる価値観が歴史的、文化的前提の上にいかにして成り立っているのかを検討する点であろう。というのも、アザラシをめぐる対立には、植民地主義の歴史、先住民の権利、土地や動物との関係、文化的実践をめぐる認識の違いが複雑に絡み合っているからだ。

本発表では、Tagaq のアザラシをめぐる表現をいくつか分析しつつ、イヌイットのレジリエンスについて考察する。本発表におけるレジリエンスは、困難に耐えることや、過去の状態へ回復することだけを意味しない。植民地主義の影響や環境変化のなかで揺らぐ文化、身体、土地、動物との関係を、Tagaq のパフォーマンスや歌といった創造的な実践を通して再考し、未来へとつないでいく力としてとらえ直したい。そのうえで、変容を迫られてきたイヌイットの文化や自然との関係性が、いかに維持され、再構築されうるのかを探る。